

日英グローバル・セミナー
グローバルな課題への取り組みと国民国家の役割
日英協力の可能性



2014年10月2日-3日



冷戦終焉より四半世紀、多極化が進み、地政学的リスクが各地で顕在化することにより、世界の不確実性はいっそう高まりつつある。自由と民主主義、法の支配などの諸価値を共有し、ともに米国の同盟国でもある日本と英国が、世界システムの安定化に果たせる役割は大きい。しかしながら、両国間の戦略的パートナーシップ強化の動きは端緒にすぎたばかりである。

本会議は、世界的課題に対する国民国家のありうべき役割、とりわけ日本と英国が、国際的課題に対して共同でどのような取り組みが可能であるかという観点から、その可能性と展望を論じるものである。喫緊の重要課題への対応と解決を図っていく上で、またそれらの課題に対する国際機関の積極的な関与と効果的な対応を促す上で、国民国家として個別に、あるいは連携して貢献できることは何かという点について討議が行われる。加えて、グローバル及び地域の重要課題への対処が期待されている既存の制度と構造が十分に機能しているかについて、特に日英両国の経験がより生かされるであろう東アジアに焦点をあて考察する。

2日間にわたって開催される本会議の初日は、破綻国家・破綻しつつある国家への対応、人災・自然災害への取り組み、民主主義への移行期にある国家への関わり方といった幅広い3つの分野における日英協力の可能性と展望を検証する。2日目は、初日のテーマに関係するより具体的な3つのケース、シリア難民問題、福島における複合災害（震災、津波、原発）、ミャンマーの民政移管を取り上げる。

* 本会議は5カ年計画の2年目にあたり、グレートブリテン・ササカワ財団の協力のもと、日本財団の助成事業として実施されている。

10月2日 木曜日

08.30-09.00	受付
09.00-09.30	開会挨拶 笹川陽平 日本財団会長 ロビン・ニブレット 英国王立国際問題研究所所長 ティモシー・ヒッチنز 駐日英国大使
09.30-10.45	基調講演：ジョン・メージャー卿 元英国首相（1990-97年） 「欧州における安全保障と地域的枠組み：アジアへの示唆」 進行：山中燐子 オックスフォード大学 中央アジアフォーラム ディプロマティック・フェロー
10.45-11.00	コーヒーブレイク

セッション1 破綻国家への対応

11.00-12.30

破綻国家や破綻が間近に迫っている国家は、地域の平和と安定にどれだけの脅威となり得るか。そのような共通の脅威に対し、国際社会が協調して対応するための条件は何か。破綻国家や破綻しつつある国家（例えばウクライナ、アフガニスタン、リビア、ソマリアなど）により惹起された課題に対し、日英両国が個別に、または共同で、あるいは他国と協力して行った今日までの対応をどう見るか。国際社会がそのような課題に対峙するにあたり、有益かつ教訓が得られた具体的な事例はあるか。

パネリスト：

田中明彦 国際協力機構（JICA）理事長

アダム・ロバーツ卿 オックスフォード大学 政治・国際関係学部名誉教授

猪口孝 新潟県立大学学長

モデレーター：ロビン・ニブレット 英国王立国際問題研究所所長

12.30-13.30 昼食

セッション2 人災・自然災害への取り組みー災害管理と国際協力の可能性

13.30 - 15.00

近年の環境災害や技術的問題に起因する災害から得た政策的な教訓のうち、各国および国際機関がリスク低減やその備えとして、適用できる良き慣行（グッド・プラクティス）は何か。日英両国が同様の課題に向き合う場合の比較優位は何か。政策の強みを活かすことができるのは、個別対応なのか、それとも共同対処なのか。日英両国と最も親和性の高い国際機関、地域機構はどこか。また1995年の阪神淡路大震災（1995年）、インド洋大津波（2004年）、ミャンマーを襲ったサイクロン「ナルギス」（2008年）、東日本大震災（2011年）、インドに上陸した巨大サイクロン「ファイリン」（2013年）、フィリピンを直撃した台風「ヨランダ」（2013年）などの近年の災害から、上記の課題、とりわけ救援、国内避難民、復興、住宅、衛生面などにおいて特に検討すべき事例はあるか。各国が災害リスク低減と有事への備えを強化する上で、日本、英国、そして国際機関はどのような政策提言ができるか。アジアにおける最近の災害救援の際に見られた軍隊間連携から学べることはあるか。

パネリスト：

谷口智彦 慶応大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授、内閣官房参与

マルガレータ・ワルストロム 国連国際防災戦略事務局（UNISDR）特別代表

陸将松村五郎 東北方面総監

モデレーター：イザベル・ヒルトン チャイナ・ダイアログ編集員

15.00-15.30 コーヒーブレイク

セッション3 民主主義への移行

15.30 - 17.00

権威主義的体制から民主主義体制への移行を図るための必要条件とは何か。また外部の介入はどの程度有効か。これまでにガバナンス向上に果たしてきた日英両国の国際的な役割と支援は、功罪両面からどう捉えられるべきか。近年、安倍首相や麻生元首相らが「価値観外交」、「自由と繁栄の弧」の概念の重要性を強調してきたが、日本は単独、または英国と協力して、あるいはその他の国々や国際機関と連携して、円滑な移行を図るためにより積極的な役割を担うべきであるのか、またそれができるのかどうか。そのような移行や変革は、世界の安定に貢献するのか、損ねることになるのか。また例えば北朝鮮などにおける将来の民主化への移行の可能性を考察するにあたり、ジャスミン革命など過去の類似の展開から学ぶべきことがあるのか。

パネリスト：

デイビッド・マローン 国際連合大学学長、国際連合事務次長

アンドリュー・ギャンブル ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジ教授

竹中治堅 政策研究大学院大学教授

細谷雄一 慶應義塾大学法学部教授

モデレーター：白石 隆 政策研究大学院大学学長

10月3日（金）

09.00-09.30 受付

09.30-10.30 開会セッション

現在の国際機関、地域機構をはじめとする制度・枠組みは、破綻国家、災害管理、民主化移行などにかかわる諸課題と増大する地政学リスクに対応できるのか。

セッション4 破綻国家への対応：シリアのケース

10.30-12.00

シリアの難民問題の発端は何か。また、この課題に責任を持って対応すべき主体は何か。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は、シリア難民のニーズにどれだけ効果的に応えることができているか。難民の人道的なニーズが国家主権の利害関係や国境警備隊が抱える課題と衝突した場合はどうなるのか。シリアの隣国であるトルコやヨルダンはこのような課題にどう応えているか。日本と英国はこの課題に対し、とりわけ人道援助や平和維持要員の派遣などを通じてどのような役割を果たし得るか。

パネリスト：

藤原帰一 東京大学大学院法学政治学研究科教授

ジェレミー・ボーエン 英国放送協会（BBC）中東特派員（調整中）

ナイジェル・フィッシャー 国連人道問題調整事務所（UNOCHA）国連事務次長補、シリア担当調整官

マイケル・ウィリアムス卿 貴族院議員、英国放送協会（BBC）理事

モデレーター：野上義二 日本国際問題研究所 理事長兼所長

12.00-13.00 昼食

セッション5 人災・自然災害への取り組み：複合災害のケースとしての福島

13.00-14.30

2014年4月、日本政府はエネルギー基本計画を閣議決定し、事実上原発ゼロ目標を撤回し、六ヶ所村における使用済み核燃料の再処理も継続されることとなった。この決定に伴う日本のプルトニウム備蓄と高レベル放射性廃棄物の処理をめぐる国内外の不安にどのように対応すべきか。また再生可能エネルギーの代替可能性はどこまで高められるか。とりわけ被災地の復興に再生エネルギーの振興を図ることは現実的か。原発事故以降の対応がドイツと日本では異なったがその理由は何か。今後原子力エネルギーへの依存度を高める諸外国は、日本の経験から何を学ぶことができるか。

パネリスト：

黒川清 政策研究大学院大学アカデミックフェロー

ラッツ・メツ ベルリン自由大学政治学科 教授

ほか1名調整中

モデレーター：デービッド・ウォーレン卿 英国王立国際問題研究所アソシエート・フェロー、前駐日英国大使（2008-2012）

14.30-15.00 コーヒーブレイク

セッション6 ミャンマーにおける民主化過程からの教訓

15.00 - 16.30

ミャンマーの民主化はどこまで進んだか。何を契機として一連のプロセスが始まり、日本、英国を含む海外からの政府開発援助や経済分野、平和構築分野での支援と取り組みは民政移管の過程とその持続性を担保するにどれだけ重要であったか。民主化の進展が途中で頓挫しないための条件とは何か、日本や英国の役割は存在するか。また例えばタイで発生したクーデターなど過去に起きた体制移行の事例からミャンマーに適用可能と思われる教訓はあるのか。

パネリスト：

デーヴィッド・スタインバーグ ジョージタウン大学教授 アジア学特別教授

タンミンウー ヤンゴン・ヘリテージ・トラスト会長

笹川陽平 日本財団会長、ミャンマー国民和解担当日本政府代表

ジョナサン・ヘッド 英国放送協会（BBC）東南アジア特派員

モデレーター：道傳愛子 日本放送協会（NHK）解説委員

16.30-17.00 閉会挨拶

17.00 閉会